



日本植物病理学会ニュース 第46号

(2009年5月)

【本学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成21年度日本植物病理学会大会は3月26日(木)から28日(土)まで、山形市の山形県生涯学習センター(遊学館)と山形大学小白川キャンパスにおいて開催されました。当日は、それまでの春のような陽気から、一転なごり雪がちらつく肌寒い日々となり、天候には必ずしも恵まれたとはいえませんでした。今年度は、東北地区の担当ということで、前年秋の東北部会の際に開催された部会で部会幹事の皆様に大会運営委員をお願いしたほか、従来の口頭発表の他、ポスターセッション、課題別シンポジウム、さらに市民向けシンポジウムを開催するなど新たな試みで行うことを決定しました。また、プログラムの編成は岩手大学の吉川信幸先生を中心に担当していただくこととなったため、大会本部は会場設営や当日の運営に専念することができました。

今年度の学会は、講演申し込み数が432題(内ポスター242題)であり、昨年並みでしたが、学生発表はすべてポスターを原則としたことなどから、多少の混乱もありました。課題別シンポジウム16題、市民シンポジウム2題も加えると、合計で450題の講演が行われたことになります。大会参加者は名誉会員および永年会員のほか、ご招待した韓国植物病理学会の現会長 Seung Hun Yu 先生および前会長の Jae Youl Uhm 先生も含めて884名となり、昨年度よりは少な目となりました。本大会はこれまでとは大きく異なった様式で行ったにもかかわらず、特にトラブルもなくスムーズに進行できました。これも、講演者および各会場の進行係の皆様のご協力のおかげと感謝しております。

懇親会は26日の夕刻、市内のホテルで開催され約460名の会員の皆様に参加されました。来賓の山形大学の結城章夫学長、山形県農林水産部の芳賀泰典課長から歓迎のお言葉を賜り、大韓民国植物病理学会の Yu 会長からお祝いの挨拶をいただきました。ついで、鏡割りのあと、山形大名誉教授富樫二郎大会顧問の音頭で乾杯して開宴となりま



市民シンポジウムの開催風景

した。会場では、山形県各地の地酒や名産品、郷土料理などがテーブルに並び、行列が絶えませんでした。

東北地区での植物病理学会の大会開催は、過去に仙台市、盛岡市で行われた経緯がありますが、山形市での開催は初めてのことであり、会場の選定等において、何かと苦勞がありました。結果的に総会会場と講演会場が離れた場所にせざるを得なかったことなど、参加者の皆様には大変ご不便をおかけいたし、心からお詫びいたします。ただ、講演会場の小白川キャンパスは比較的清潔で、また会場間もそれほど遠くない位置に設定でき、ほとんど問題がなかったものと思っております。最後になりますが、本大会が大きなトラブルもなくスムーズに終えることができましたのは、学会役員、評議員はじめ大会参加の皆様、東北地区の会員の皆様さらに山形県農林水産部の職員の皆様、山形大学の職員の皆様のご支援の賜物とあらためて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。(生井恒雄)

2. 研究会開催報告

(1) EBC 研究会ワークショップ

発足以来5回目のEBC研究会ワークショップ2009が、

平成21年3月25日13:00～18:00まで山形大学小白川キャンパスで103名の参加者を得て開催された。

第一部は山形県農業総合研究センターの本田浩央氏による「山形県におけるセイヨウナシの防除体系の構築—輪紋病を中心とした果実腐敗性病害のエビデンス—」から始まって農研機構東北農業研究センターの小泉信三氏による「東北地域におけるイネいもち病防除の現状」、秋田県農林水産技術センターの藤井直哉氏による「秋田県におけるいもち病減農薬防除のエビデンス」と続き、果樹王国山形県の状況と東北地方の農業を語る上で避けて通れないイネいもち病への取組が示された。佐賀県上場営農センターの田代暢哉氏からは「統計解析手法の誤った適用事例に学ぶ—よりよいエビデンスのために—」と題し、量的変数と質的変数の取扱いを適正に行えば、実感される処理効果の違いが適切に検定結果に表れることが示された。

第二部前半は「近年開発されたべと・疫病防除薬剤の各種特性と効果的な使用方法」と題し、日本植物防疫協会の田代定良氏の「プロログ～これまでに登録されたべと病・疫病防除剤～」とした総括的報告の後、クミアイ化学工業の高垣真喜一氏から「ベンチアバリカルブイソプロピル」、シンジェンタジャパンの平田哲也氏から「マンジプロパミド（レーバス[®]）フロアブル」、日産化学工業の本田卓氏から「アミスルブロム（ライメイ[®]）フロアブル」、バイエルクロップサイエンスの沢田勝鏡氏から「フルオロピコリド」と新剤に関する発表があった。後半は「農薬製剤のエビデンス」と題し、「農薬製剤剤型の解説」として日本曹達の鈴木雅博氏から「原体の物理的特性からの最適剤型選抜について」とした講演があり、「剤型の違いが防除効果および薬害に及ぼす影響」について、クミアイ化学工業の藤田茂樹氏から「水稲用散布剤：DL粉剤から微粒剤Fへの改良によるドリフト軽減効果」、エス・ディー・エスバイオテックの前田恭宏氏から「クロロタロニルの水和剤からフロアブルへの改良による効果の向上」として具体的事例が示された。

各講演終了後は、降りしきる雪をも溶かす熱い質疑応答が繰り返され、熱気さめやらぬ中、次回京都での再会を期して散会となった。（根岸寛光）

(2) 第10回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成21年3月28日に山形大学小白川キャンパスにおいて第10回植物病原菌類談話会が開催された。学会最終日の夜にも拘らず、大学、独立行政法人、公立の試験研究機関、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など約150名の学生・研究者の参加があった。

本年度は「あなたなしでは生きられない…絶対寄生菌」

というタイトルでさび病菌、うどんこ病菌、べと病菌、根こぶ病菌に関する講演が行われた。それぞれの講演題目と講演者は、「さび菌類の生活環研究における野外観察と接種試験の重要性」原田幸雄（弘前大学農学生命科学部）、「公設試としてのうどんこ病研究への取り組み」星秀男（東京都農林総合研究センター）、「べと病菌～分離・培養の基礎そしてここ数年の話題」佐藤衛（農研機構花き研究所）、「アブラナ科野菜根こぶ病の分類・同定・保存法」浅野貴博（日本原子力研究開発機構地層処分研究開発部門）であった。さび病菌の講演では原田先生の長年の研究の成果を発表いただき、さび菌はまさに「あなたなしでは生きられない」ことを教えていただいた。うどんこ病菌については、最近問題となっているキュウリうどんこ病菌の生態的研究やうどんこ病菌の取り扱い方などを現場の視点から講演いただいた。べと病菌については、最近再編された分類ではかなり複雑に属が創設されていることの紹介があり、農作物の病原菌では1属のみを注意すればよいことを教えていただいた。また、べと病菌の飼育方からレース検定の難しさなど実場面からの説明もあった。根こぶ病菌については、大分類において所属する界が最近変更になったことや類縁の植物病原菌などの紹介があった。また、根こぶ病菌の培養法についてご自身のデータを示しながら、100年以上研究されているにも拘らずまだ解明できていないことが示された。講演全体を通して、やはり絶対寄生菌を取り扱うのは難しいことを再認識したが、その突破口としての取扱法も学ぶことができ有意義な会となった。

来年度も学会大会に合わせて開催を予定しています。

（影山幸二）

(3) 第19回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

平成21年3月29日、第19回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムを山形大学小白川キャンパス（山形県山形市）2号館にて開催した。花冷えの寒風が吹く中、学会大会終了後の休日にも関わらず、公的試験研究機関、大学、農薬メーカー、農業団体など合計127名（講演要旨のみ含む）の参加が得られ、熱心な講演、協議が行われた。講演は計8題行われ、山形県農林水産部の早坂剛氏からは「山形県における水稲病害および殺菌剤耐性菌の発生状況」と題し、殺菌剤耐性菌の発生経過やMBI-D耐性菌対策内容について紹介された。次に、総合研究大学院大学・九州大学の鈴木清樹氏より「理論疫学からみた殺菌剤耐性菌の動態と防除対策」と題して、疫学的アプローチによる耐性菌対策の可能性について紹介された。岩手県農業研究センターの鈴木敏男氏からは「岩手県におけるりんごハダニ類に対する殺ダニ剤の合理的使用体系」と題し、殺ダニ剤の隔年使用

による抵抗性ハダニの発達遅延状況などが詳細に紹介され、殺菌剤におけるローテーション防除を考える上でも参考となった。クミアイ化学工業の高垣真喜一氏からは「新規殺菌剤ピリベンカルブの開発と耐性菌マネジメント」と題し、QoI 剤ではあるが従来のストロビリン剤とは分子構造が異なることや既存の QoI 剤耐性菌にも十分な防除効果があることなどが紹介された。岐阜県農業技術センターの渡辺秀樹氏からは「岐阜県におけるトマト葉かび病菌のアズキシストロピンに対する感受性低下」について報告され、同菌の発生経過や菌糸磨砕液を使用した感受性検定法などが紹介された。「QoI 剤耐性ブドウ褐斑病菌の発生」については、岡山県農業総合センターの井上幸次氏および福岡県農業総合試験場の菊原賢次氏より、QoI 剤耐性菌の検定方法および発生状況や同耐性菌に対する数種薬剤の効果などについて紹介された。農業環境技術研究所の石井英夫氏からは「QoI 剤耐性の現状と課題」と題し、QoI 剤耐性菌の発生状況や耐性メカニズム、遺伝子診断とその問題点、検定方法、使用ガイドライン等が紹介された。最後に「QoI 剤耐性菌の発生要因とその対策、マネジメントのあり方を考える」をテーマにパネルディスカッションを実施した。QoI 剤耐性菌の農業生産に与える影響が大きいだけに、QoI 剤使用ガイドラインの作成や現場指導のあり方などについて熱心な議論が交わされ、今後のガイドライン作成の方向や研究会として耐性菌被害回避にむけた努力を継続していくことを確認し、閉会した。(宗 和弘)

(4) 第 11 回バイオコントロール研究会

第 11 回バイオコントロール研究会は、平成 21 年 3 月 29 日(日)に山形大学小白川キャンパスで約 170 名の参加を得て開催された。今回は、開催事務局を担当していただいた山形大学生井恒雄氏らの企画により、「微生物と植物の相互作用を利用した病害防除—生物防除の基礎と応用—」のテーマで、基調講演の後、第一部「基礎」2 題、第二部「応用」3 題、第三部「新規登録農薬の開発経緯と普及に向けた取り組み」で 3 題の講演発表がなされた。基調講演では、九州大学土屋健一氏から「生物防除の将来展望について」と題して、研究会のこれまでの歩みと最新情報の提供があった。続いて、第一部に移り、農業生物資源研究所の高辻博志氏から「イネの誘導抵抗性を担う転写因子 WRKY45 の解析から見えるイネ—いもち病菌の攻防」、同じく光原一朗氏から「タバコ植物における病・虫害誘導抵抗性と細胞死の情報伝達とクロストーク」と題して誘導抵抗に関する最先端の研究について話題提供があった。第二部では、農研機構果樹研究所の兼松聡子氏、農研機構野菜茶業研究所の篠原 信氏、農林水産技術会議事務局の吉田

重信氏から、それぞれ「dsRNA を利用した白紋羽病の生物防除」、「根圏の活性化を利用したトマト青枯病の生物防除」、「有用微生物の組み合わせによる生物防除」と題して実用化を想定した基礎的な研究の紹介がなされた。第三部では実際に実用化、普及の場面から、日本微生物防除剤協議会の土井清二氏「日本微生物防除剤協議会の活動に関して」、セントラル硝子の丸池和泉氏「アブラナ科根こぶ病剤(フィールドキーパー)の開発」、京都府農業資源研究センターの小坂能尚氏「キュウリモザイク病を防ぐ新規ズッキーニ黄斑モザイクウイルス弱毒株水溶剤(キュービオ ZY-02)の開発と普及展開」と題して現状報告がなされ、活発な議論がなされた。なお、講演要旨集(2,000 円)をご希望の方は、対馬(農業環境技術研究所) seya@affrc.go.jp までご連絡いただきたい。(百町満朗)

(5) 技術士(農業部門・植物保護)試験対策セミナー

平成 21 年度日本植物病理学会大会の第 2 日目(3 月 27 日)の 13:00~14:30 の間、山形大学小白川キャンパス教養教育棟 1 号館 122 教室で、標記のセミナーを開催した。主催は日本植物病理学会の技術士対応委員会。なお、本セミナーの開催に当たっては、大会委員長の生井恒雄先生、事務局長の長谷 修先生には特段のご配慮をいただいた。厚くお礼を申し上げる。

最初に、本セミナーを開催するに至った経緯を簡単に述べる。平成 16 年 4 月 1 日、国家資格(文部科学省所管)である技術士(農業部門・植物保護)が誕生した。それに先立って、日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会が連携し、当時の東京大学の日比忠明教授等のご尽力により文部科学省に申請し、めでたく誕生に至った。平成 16 年 4 月、日本植物病理学会では植物保護士制度等対応委員会(現在:技術士対応委員会)を設置し、さらに、上記の 5 学会では技術士に関する委員会(現在:技術士育成推進委員会)を設置し、お互いに連携を取りながら新生の技術士(農業部門・植物保護)の育成や社会での活躍についての方策を検討するとともに、技術士の活用を行政部局等をお願いしてきた。

5 学会の当面の目標を 100 名の技術士(農業部門・植物保護)育成とした。学会独自で作成したパンフレットや日本技術士会の「技術士試験・受験のすすめ」を春の学会開催時に積極的に配布し受験促進を行ってきた。また、各学会の評議員会でも受験促進に取り組んでもらった。その結果、第一次試験(合格者は技術士補資格を取得)、第二次試験(合格者は技術士資格を取得)の合格者は、毎年、増えてきた。第二次試験の合格者は、スタート以降の 5 年間で 19 名。目標の 100 名を達成するため、積極的に受験促

進に取り組むことになり、今回のセミナーの開催となった。

セミナーの講師は、技術士（農業部門・植物保護）の誕生にご尽力いただいた日比忠明先生（現 法政大学生命科学部）、技術士第一次試験、技術士第二次試験に合格された経験をお持ちの鍵和田 聡先生（法政大学生命科学部）、濱本 宏先生（東京大学大学院農学生命科学研究科）、森 充隆主任研究員（香川県農業試験場）、中保一浩主任研究員（農研機構中央農業総合研究センター）にお願いした。

日比忠明先生は、技術士制度、技術士や技術士補の定義、技術士や技術士補の要件等について紹介された。農業部門は第二次試験の選択科目によって、畜産、農芸化学、農業土木、農業及び蚕糸、農村地域計画、農村環境、植物保護（内容は、病虫害防除、雑草防除、発生子察、農薬その他の植物保護に関する事項と定められている）の七つに細分化されており、植物保護が畜産や農芸化学や農業土木等と対等に位置づけられている。このことから植物保護が大きくクローズアップされ、技術士として社会から期待されている事が理解できる。技術士（農業部門・植物保護）の活躍が期待される分野として、食の安定供給（食用作物や飼料作物の病虫害と雑草防除）、食の安全確保（安全な農薬の開発、残留農薬等の検査と汚染防止、組換え作物や食品の適正管理、トレーサビリティの確立）、衣・住の安定供給（繊維作物や材木の病虫害防除）、自然環境の保全（環境保全型農業の推進、農薬使用の適正管理、緑地や森林の保護管理、生物多様性の維持、地球生態系の保全）を紹介された。技術士（農業部門・植物保護）が社会に大きく羽ばたき、国民から認知され、活躍できる時代が来たと考えられ、高度の専門的知識、技術、経験を有している日本植物病理学会員が、積極的に技術士（農業部門・植物保護）の資格を取得されることを期待すると激励された。

鍵和田 聡先生は第一次試験対策について紹介された。受験申込みは6月、試験は10月。受験申込み時に大学卒業の証明書の提出が求められるので早めに準備しておく。インターネット申込みが便利である。この場合、証明写真、卒業証明書は電子化してアップロードする。全科目「五肢択一」のマークシート方式。試験勉強は受験申込みをしてからでも間に合う。仕事、研究の合間に時間を見つけて勉強する事は難しいが、条件は皆一緒なので、コツコツと励むこと。過去問を解くことを中心として、各科目とも広く浅い知識が要求される。時事問題の割合も大きいので、日頃からニュース、新聞の情報で知識を仕入れておくこと。適性科目に対しては、技術士法、技術士倫理要綱、PL法、消費生活用製品安全法、大気汚染防止法、京都議定書、トレーサビリティ等の時事問題に目を通しておく。基礎科目

は科学技術全般にわたる基礎知識を問うもので、設計・計画（システム設計）、情報・論理（アルゴリズム）、解析（力学・電磁気学）、材料・化学・バイオ、環境・エネルギー・品質管理等に関する問題である。過去問を解いた上で、その中身を把握し、関連するキーワードを調べておくこと。論理問題、計算問題は、問題を解くことで慣れておくこと。専門科目は35問から25問を選択して回答するが、10問しか捨てられない。農業と農業土木の問題の割合が大きく、農業土木を完全に無視することは出来ない。過去問を解いて、知らない用語を調べておく。得意分野、なじみのある分野を重点的に勉強し、確実に得点する。例年7月に刊行される農林水産省の食料・農業・農村白書を読んでおくことなどの具体的対策を示された。

濱本 宏先生は第二次試験対策について紹介された。受験申込みは4月、8月に筆記試験。筆記試験の合格者発表が10月で、合格者に対して11月に技術的体験論文の作成と提出がある。その後、12月～1月にあらかじめ受験者に通知する1日、口頭試験があり、3月に合格者発表がある。受験申込み時に業務経歴票があるが、その後の技術的体験論文、口頭試験とも整合性がとれている事が、極めて重要である。従って、この業務経歴票を熟慮して作成する必要がある。筆記試験には、農業全般にわたる論理的考察力と課題解決力を問う必須科目、植物保護に関する専門知識と応用能力を問う選択科目があり、いずれも記述式回答である。過去問を調べ、自分なりの勉強方法を作ることが大切である。筆記試験に合格すれば、技術的体験論文の作成と提出となるが、合格発表から時間があまりないので、あらかじめ準備しておくが良い。論点は単純な方が良い。口頭試験では、業務経歴を簡潔に説明できること、筆記試験の答案内容や技術的体験論文の内容も質問の対象になること、技術士の義務などの知識も学んでおくことが大切であるなどの具体的対策を示された。

森 充隆主任研究員は、第一次および第二次試験の合格体験を紹介されたが、講演時間が5分間と極端に短かったにもかかわらず、明確な内容であった。第一次試験対策は、過去問で実力試しを行った。先の先生方と同様に、ホームページ：技術士受験支援塾が大変役立った。第二次試験対策としては、食料・農業・農村基本法、食料・農業・農村基本計画、食料・農業・農村白書に目を通す。過去問に対して自分で具体的に書いてみる。一番重要な事は、問いにちゃんと答えているか。例えば、「……基本方向を踏まえ、その現状と課題について複数の視点から述べるとともに、課題解決の方策、今後のあり方について、主として技術的側面からあなたの考えを述べよ」という設問で、どれ

だけ正確に答えられるか考えてみて下さい、との指摘をいただいた。

中保一浩主任研究員も、第一次および第二次試験の合格体験を紹介されたが、同じく講演時間が5分間であるにもかかわらず、充実した内容であった。第一次試験はどの部門で合格しても第二次試験を農業部門・植物保護で受験出来る。中保さんは第一次試験を得意な生物工学部門で合格し、翌年、第二次試験を農業部門・植物保護で合格した。第一次試験対策は、過去問の練習。適性科目では技術士法第四章が大切。専門科目では最新技術も含め重点的に勉強した。第二次試験対策としては、日頃から意識して植物保護関連の最新の話題に触れておくこと。過去問に対して自分で具体的に解答を作成してみる。口頭試験では、技術士受験の動機、経歴の説明が出来るようにする。技術士法の方法、目的、義務、責務等については覚えてしまう。また、技術者倫理についても勉強しておく。技術士（農業部門・植物保護）は植物保護関係者が育てていく資格であると確信しており、積極的な受験をして欲しいとの提言をいただいた。

セミナーの参加者は、民間、大学、都道府県、独立行政法人等から52名であった。中でも、都道府県から31名が参加された。各話題提供者の話は、説得力のある素晴らしい内容で、多くの質問もあり活気に満ちていた。技術士（農業部門・植物保護）への期待、希望、挑戦が大きく膨らんだセミナーであった。主催者一同、深く感謝している次第である。（稲葉忠興）

3. 技術士対応委員会

平成20年度の技術士第二次試験（農業部門・植物保護）に6名が合格

平成21年3月6日に平成20年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の合格者が発表されました。次の6名の方が合格されました。

國友義博さんは山梨県総合農業技術センターに所属され、日本応用動物昆虫学会会員です。

白石俊昌さんは群馬県農業技術センターに所属され、日本植物病理学会会員です。

小谷野伸二さんは東京都病害虫防除所に所属され、日本応用動物昆虫学会会員です。

星 秀男さんは東京都農林総合研究センターに所属され、日本植物病理学会会員です。

新山徳光さんは秋田県病害虫防除所に所属され、日本応用動物昆虫学会会員です。

伊澤宏毅さんは鳥取県農林総合研究所に所属され、日本応用動物昆虫学会会員と日本農薬学会会員です。

平成21年度の技術士第一次試験は平成21年10月12日に行われます。また、技術士第二次試験は平成21年8月2日に行われます。詳細は日本技術士会のホームページをご覧ください。

日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会は、技術士・農業部門・植物保護の社会での活躍について、積極的に取り組んでいます。当面の目標は100名の技術士（農業部門・植物保護）の誕生です。平成21年度も多くの技術士・農業部門・植物保護の誕生を期待しています。

（技術士対応委員会委員長 稲葉忠興）

【今後の学会活動予定】

1. 平成21年度部会開催予定

日本植物病理学会ニュース第45号（第75巻第1号）をご覧ください。

2. 平成21年度植物感染生理談話会開催予定

日 時：平成21年8月6日～8月8日

場 所：大沼国際セミナーハウス

北海道亀田郡七飯町字大沼町127番地1

問い合わせ先：犬飼 剛

E-mail: yoshi@abs.agr.hokudai.ac.jp

詳 細：第75巻第1号の巻頭綴じ込みをご覧ください。

3. 第6回植物病害診断教育プログラム開催予定

受講対象：本学会会員と非会員（若手・社会人を優先します）

募集定員：25名

開催日時：平成21年8月17日（月）から8月21日（金）までの5日間

開催場所：岐阜大学応用生物科学部

岐阜県岐阜市柳戸1-1

受講費用：本学会会員 30,000円（学生は15,000円）
+ 懇親会費4,000円（予定）
非会員 40,000円（学生は20,000円）
+ 懇親会費4,000円（予定）

申し込み：実行委員代表（岐阜大学応用生物科学部、植物病理学研究室 百町満朗）

メール hyakumac@gifu-u.ac.jp あるいは
ファックス (058-293-2847) で、氏名、勤務先（学校名）とその所在地、メールアドレス、電話番号、受講希望理由を明記の上、5月25日（月）以降に申し込んでください（事前の

申し込みは受け付けません)。

詳細：本号の巻頭綴じ込みをご覧ください。

【書評】

森林総合研究所森林微生物研究領域編「樹木病害デジタル図鑑」

CD版、発行 平成21年3月、全国森林病虫獣害防除協会
(〒101-0047 東京都千代田区内神田1-1-12 コープビル8階 E-mail: shinrinboeki@zenmori.org; FAX 03-3293-4726)

定価 3,000円 (税込み、送料別)

この図鑑は、森林総合研究所や他の組織の研究者42名が執筆を分担し、主要な緑化樹・造林木(針葉樹13種、広葉樹98種等)の304病害について、それぞれの解説と病徴・被害写真を1枚のCDに収納している。CDをパソコンに入れると自動的に立ち上がる最初の画面では、各病害を宿主ごとのリストから探すか、キーワードで検索するかを選ぶページが現れる。キーワードは記述されている全ての語句・文から検索できるので、病原体、宿主はもちろん、症状の説明文からも、関係病害をピックアップできて便利である。各病害の解説ページは、病名とその英名、宿主とその学名、病原体、症状、病徴写真(各病害1~4枚)とその簡単な解説からなり、各写真をクリックするとクローズアップが見られるようになっている。数年前に米国植物病理学会から発行された樹木病害のCD図鑑に比べ、今回の図鑑は登載病害数が少ないが、総画像数は897枚と多く、病害ごとにページが構成されているので、ひとつひとつの病害を調べるには好都合である。プログラムもブラウザソフトで動くようになっているため、シンプルで、その分価格も手ごろになっている。画像を講義や研修などに利用できることから、そのような機会が多い教育関係者にも重宝であろう。ただ、解説用の写真が1枚しかない病害や、色あせたりカラーバランスの悪い写真が若干あることがやや気になる。この種の図鑑は改訂・増補が容易と思われるので、今後さらに



充実した内容になることを期待したい。ともあれ、研究・教育関係者や樹木医に限らず、日々現場で樹木類の病害に向かい合っておられる林業、園芸、造園関係の方々にも、この画期的な図鑑が大いに役立つに違いない。(佐藤豊三)

微生物と植物の相互作用 —病害と生物防除—

編集：百町満朗 対馬誠也

ソフトサイエンス社 ISBN978-4-88171-120-0

定価 9,000円 + 税

昨年の「餃子農薬汚染」以降、「食の安全安心」への要望は益々高まっている。一方、化石資源の枯渇(高騰)下においても安定した食料生産を目指すことが、全世界の課題となっている。世界の耕作面積が砂漠化などで伸び悩む状況下で、35%にのぼる作物のロスを如何に削減するのか、すなわち、安全、環境保全型、サステイナブルな作物保護のあり方が真剣に検討されている。

このような時期に、日本植物病理学会バイオコントロール研究会に集う50名の研究者により、将来の作物(植物)保護への道標を示す書籍がタイムリーに刊行されたことは、私ども植物病理学に携わる者の大きい喜びである。

本書は、生物防除に先導的な役割を果たしてきたバイオコントロール研究会の、発足以来20年の研究成果の結晶である。生物防除の歴史から、生物防除の基礎となるメカニズム、さらにこれらの応用(商品化された微生物資材を含む)と将来展望に至る流れが、大変丁寧に解説されており、研究者を目指す方々のみならず、第一線の研究者にとっても極めて示唆に富む内容となっている。作物保護に関わっておられる研究者はもちろんのこと、分子生物学研究や基礎研究に携わられている研究者にも是非ご一読をお願いしたい良書である。(白石友紀)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏、築尾嘉章、桑田 茂、植草秀敏、佐藤 衛
各委員宛

編集後記

学会ニュース第46号をお届けいたします。皆さん、山形で開催されました大会、大変お疲れ様でした。雪がちらつく北国らしい開催地での大会でしたが、盛会裏に終了することができました。本号では、最初に開催事務局の山形大学、そして岩手大学の先生方、また東北地区の運営関係者の方々に深謝の意を表したいと思います。課題別シンポジウム、市民シンポジウム、ポスター・セッションなど新しい試み満載の大会でしたが、白石新会長の講演にございましたように「これからの病理学会のあり方」に関していろいろと試行錯誤してゆく必要があるようです。次に、本号では大会の前後に開催された学会活動報告が続きますが、談話会や研究会いずれも継続して活発な活動が継続しており、同慶の至りです。さらに、特記すべきは「技術士試験対策セミナー」であります。本セミナーの報告を担当され、技術士の誕生に向けて、そして技術士の社会的認知のために一方ならぬエネルギーを費やしてこられた稲葉忠興氏に敬意を表したいと思います。また、日比先生はじめ講師の方々に厚くお礼申し上げます。学会としても早く、当初の目標である「技術士100名」に達することを祈念いたします。

本会ニュースは身近な情報も気軽に交換することを motto にしております。今年度も皆様からの活発なご投稿を期待しております。
(加来久敏)
